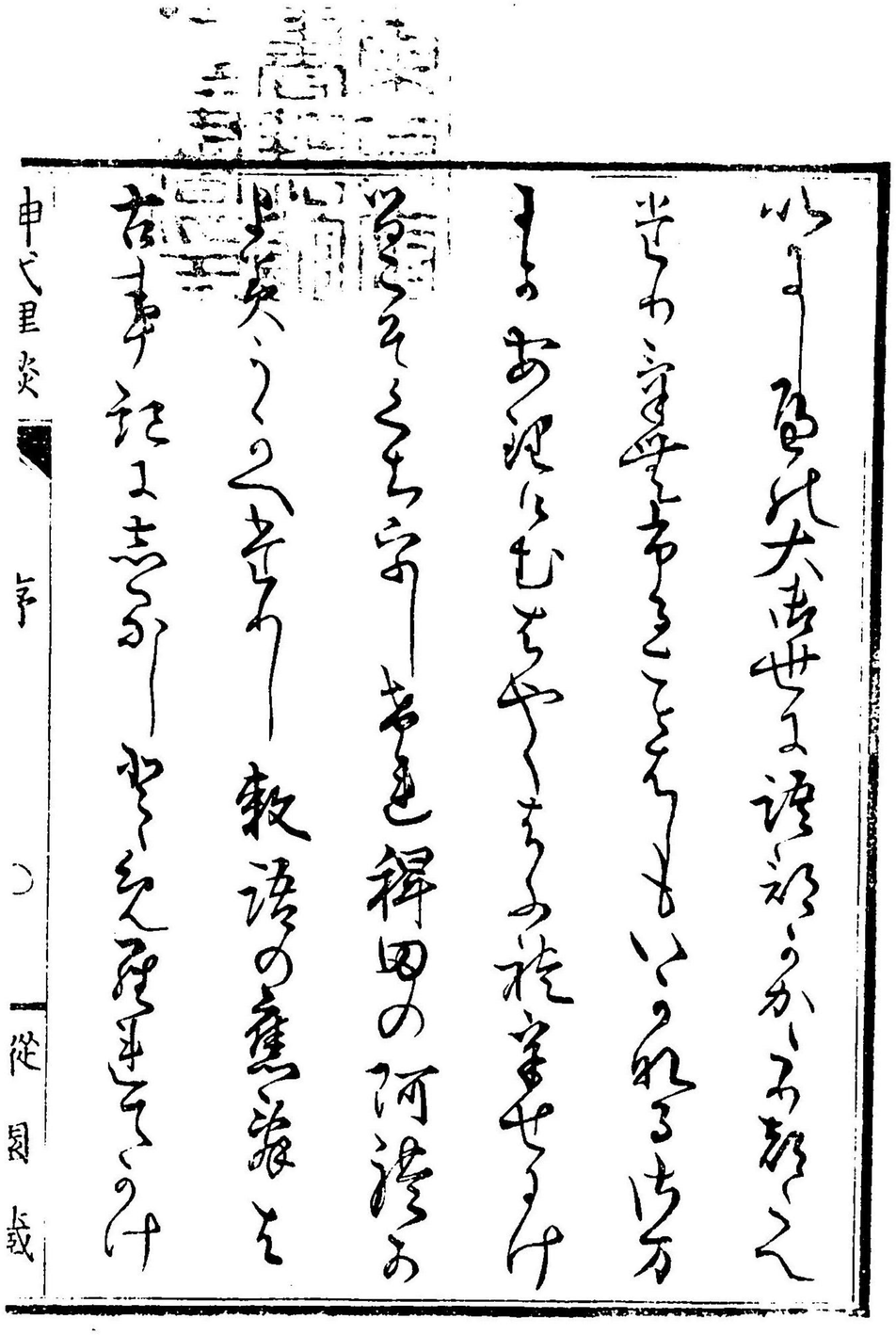
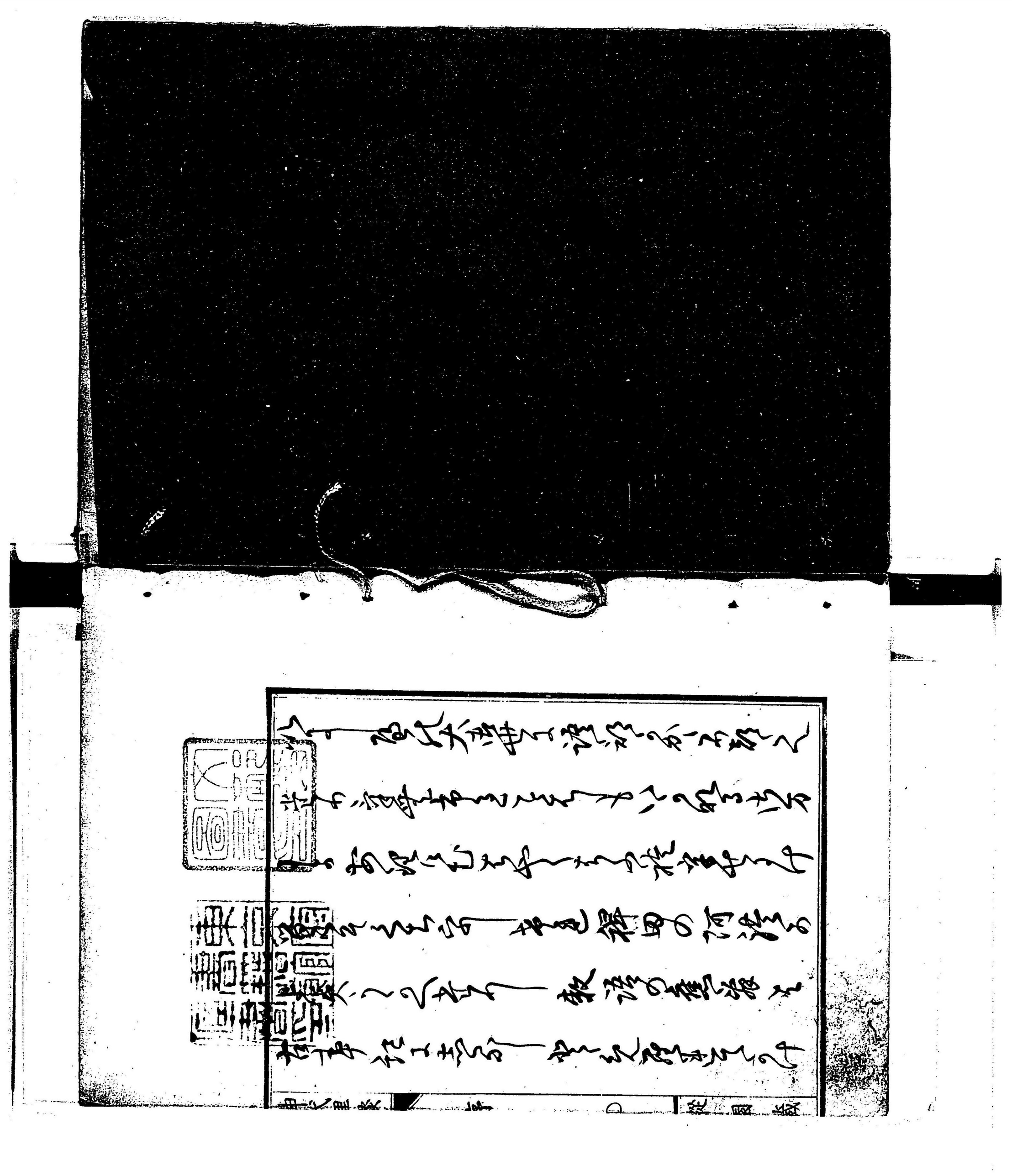
猿渡盛章著

神代俚談

武藏府中　樅園藏版





すくもうしたまふ天津日嗣の大御宝
とれ世をたもつ事なるこゝて迦き世を在
立長祈きのふるふとをいまゝ〳〵をの
うれ方みを書とゝ〳〵ゝ神代正語と
言まゝゝて世を伝へ世をこの氏大国乃
御時に齋祈廣成の古語拾遺とゝ

まをすこゝろをもて世をひきたまふ
いとゝもまをすをあつ言葉をゝ猛流
事業の河をたゝ世系神代伝語をゝ
をとをとをいたるいとみき言とのれ多
まゝあゝぬものゝ伝ふ事の乃ゝ
とゝいまれきのきゝひをゝ

[illegible]

大唐世の唐さの文字こそ拙くさいわ
いく地のつうの経きの字へ号もれ
[illegible]
[illegible]を板よ[illegible]

一云[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

拾二位大中臣教忠

大意

此世界乃をゝしめ混沌なる一物なりしうち天と地とをの〻神人其中ゟ現出ゆゑ大古乃事實ハいと〻奇〻妙〻ゝしてゆゑより人ゝさゝ星なゝど乃得しも及ぶまじきことわりなる星ちゝをいまゝ人の淳朴なる真心ゟ私乃ちゝのしらをはゞへゝぞ其ゆゑ〻ゝふゝかゝ星継ぎなるゝの神代の傳説なり其後世なるゝのゟ移りて外國乃學ゞゝ行ハきてゝより世中乃人の心乃漸〻ゝこのゝわるゝがゝきかゝゝゟ移り申きて

遂に其古事をもそれを寓言なり是ハ理ある
ハぬるよなど人智をもてあゞらひなをめむ
とするにゑまりかゝ陸ちすら心もて神典を
解むとする時ハ生涯いゝ迷きもなきもいの
でこの神なゝらんなる實ハ道を得る事ハ行ゝむい
で其はゝとハ道を得むとなゝバ初の倭魂を堅
くして私ハさのゝらをまゞ屋べ古傳説を尊信
し怠らべつと免學ぶ時ハおのづゝ其妙なる
境をも辨ふるに至ハ屋し漢土の傳ふも天地乃
初發ま盤古氏といふものの出て其左の眼ハ日と形

星右の眼を月となれりといひまゝ女媧とのいゝ
つる女黄なる土をまゝ泥をて人とふしまゝ縄を
泥まひゝし引あゞて人と形ゝ多るゞ其黄なる
土ハ化るを貴人の種と形を縄を引て造きて
ハ賤者ハ種となれるをゞもいひ印度まてハ人
といふきゝなれるをゞめを出なゞ乃湧出る
ゞゝ地中よりうゞめ紀出しよゝいひ西洋諸
國乃傳つるを世ハなゞ免天神をゞみ天地を造
まて後ま土塊をふ生ハ陸ろめて是を男女の神
とふしゝ多るゞの人類のはゞめなりともいひむ

大古乃世は海と山と婦人あり其女を阿志阿と
いふ西方より婚をもとめて要呂波安布利可を
どいふ子を生りといふ傳も何りかく上代は何
世乃国は毛水乃〳〵其傳はありなふ中はまこと
御国なり勝まて正しく委しきはなしそもいい
うあ〳〵いつゝり神魯岐神魯美神乃大御心をうら
ろとして神の生成しなひて国を神乃授け給ひ
て天壌〳〵毛不天津日嗣きまのなくいとも
尊き神国乃神国たるいとまよまて乃りうの
外国いたの是ごなるかしこ後智巧はけをほと

まて君と臣とは道正しうしてはなはだ
移まこのうるふ薄惡乃風俗をす人智の及ばざる所
は斬く畏きまを志ばかさを傳へたる古事
をば毛當然乃理は合ねざるは捨て信をば遂は
ふるきつゝへをさへ失ひたるは至るあり
抑ふるの神代の古傳を記せふふみは古事記神代
紀なりこはのけまくもかしこき朝廷は御記録
なれば第一乃正書と毛夫は次ては諸乃古き祝
詞古語拾遺姓氏録神名帳諸国乃風土記まゝ旧
事本紀も今傳たるは偽書なれば毛古傳說も存

まゝば取用ゐ難き事無ゝあらざ猶此外ゝ史の闕文を補ふ為き古書どもいと多かりかくて幼童乃らもがら是ら乃書をよゝむゝとゝるゝ古語古文をよゝ解るかゝさけまバ多くいとゝそゝよして捨てよゝ後のゝすゝ乱尊き御国ゝ生まれゝがらゝの神代乃ゝある事をゝゝざ経緯ゝの天皇の無上至尊ゝ侍ゝよゝ御事をゝるゝゝあゝハいゝくも歎のいゝ紀ゝなゝばや余けゝをゝも深くうまゝゝみ思ふがあまり近頃平田翁のあゝいゝたまゝ古史成文かもゝ新き神代乃傳へゝを考ぐ

一ちゝの俗話ゝ書ゝるゝいゝゝあゝハ継々ゝ皇代にもおよゝしてゝの文献のゝゝへゝ物を知る幼童らゝ授乃むゝとゝあハまゝ幼学のゝもが屋牌史などゝ侍むいゝゝゝ多るまゝ此書をよくゝおぼえ後ゝ古書どもゝゝむゝゝ時ハおのゝゝゝ通暁ゝやゝ考る多ゝ侍ゝ是余が素意かゝして一癖乃老婆心ゝゝゝ見む人其鄙俗をあやゝむゝなゝゝまゝ

嘉永六年四月下浣

猿渡盛章ゝる

猿渡盛章著

神代俚談上巻

孫　猿渡盛愛
門人　高木正年　校訂

一段

天地のはじめまし神世七代と申奉

かくつゝ形き書はらへるよう紀あるもしはハ怨多き法事紀の宮廷の御記録をはじめ先古くよ星今よお伝ものは書物どもを考へるもしはふ此世界のいまゞ天地と成星やくの格ざりし時大虚空の中ゆ現き移ふ神これあり御名を天御中主神とゆ其次ゆ現き移ふ神の御名を高皇産

霊神とやいふ又の御名を高木神とも高皇産霊神とも見渡る神魯岐命は
其次は現身を以て神の御名を神皇産霊神と
やいふ又の御名を神産巣日御祖命とも神皇産霊神とも
云ふ謂ゆる神魯美命は産霊
を成て此天地の象を成せるより始て世に中は
あらゆる事も物も悉く此三柱の大神の御威徳
によらざることなくして此神造化の始を事化の序は三
神造化の始は威徳は伝て
天地も象を成きりと云ふ三神ハ何れの神の威徳は伝らバ
よう者其ハ何なりけきハ知ずしてべて凡人の
小智を以て神代の古伝説を疑ふハ
愛虫の水を誤るなり等しきものぞ
空の中は一の物出来そめあらり其ありさまを物

は譬てやさバ浮雲は根も形くなる而も形くた
ざらひたる如くにはお見えいと俗へいふ是を形
ち天と成る地と成べき物の初めしの已は何
らハ是一なる至重深重のでき中よりまた一の
物出来たり其形を譬てやさバ葦の芽の
泥の中より萠出るぬくぬくと長くしと
是ハ次第小上へ〳〵と萠あがり終は下の方と
断離まて位をハ多めあるを是れを天なり天
天とやハ虚空のことをやにハこれ古く俗は謂ゆ
於大陽日輪のことまく古語は高天原とも赤根

刺天照國ともやて今の現は天照大神のは産
かされは一の世界よは産ひさて手萌あがりは
葦の芽のおとくなる事よりて現ぬふ神こ
れあり法名を宇麻志阿志訶備比古遲神とやは
手次は現ぬふ神を天之底立神とやは又のは名を天之常
立の神とも天の御柱の命とも天の鳥船の神とも天の鳥凝魂の神とも
乃神こそは一柱づゝ出現拍ゞ天となるべ
きもとゝ萌あがるふ志ぐひてもろとを立
界のひ後くまでも言天系よは産かされは故は
此五柱を別天神と称し一まりは次は天と成べき

物は萌あがるよはつぎて又一乃物虚空
乃中は成まり手五さまを弊てやさバ水の上は
膏乃うのくるゞ乃ふ又ゑゝうし虚空に
此ものを次才はかさはりて後は地となるべき
手は天と地とは上下はおもの形こそめ
なり此時まさを地と成る風きものなりて現
ぬふ神こそあるは名は成國之底立神とやはのは
名を國之常立の神ともやは手次を豊斟渟神とやはて名あま
さ地の神とも葦牙の神とも須佐の神とも天の神とも
豊の神とも葦牙の神とも須佐の神とも天の神とも
あるふ乃ふ地

と成る處きもち中ゝ清く澄りされも
ゝは次第に垂下まく大地の底乃のさに凝集り
ゝは時に二柱乃神を産成る事乃如く也大地
乃産は下至かされ永く重所は如くゝ清り社
然ゝ其所を名づけて泉見國と申す根の国と
也根堅洲と也　此時夜見國と申ゝは夜見國
とさだめて居まゝ遂に大地と離て
世界とは第ゝ是伊弉諾ゝ謂ゆる太陰月輪の也
て後ゝ須佐之男命の也
是ゆゑゝ須佐之男命の又の也名を月泉見命

と毛申奉りゝ純佐之男命と月泉見命と同
神ゝ堅ゝ是ゝ如ゝ下ゝ入ゝ
この時天と成る處き毛ゝ此ゝ前あの金泉見國と云
ふべ地毛ゝ垂くだ里ゝ間ゝ此大地と成る
奚きものを須佐之ゝ成へどもいまだ成ざ清り不
中毛時ゝ此の泥の如ふ神ゝ経あり男神の也名を
宇比地迩神と申し女神の也名を須比智迩神と
申ゝ又の沙土根の名を埴土根神と毛申ゝ次ゝ泥の如ふ男神を角
櫂神と申し女神を活櫂神と申ゝ次ゝ泥の如ふ男
神を大斗能地神と申し女神を大斗乃辨神と申
ゝ又の大苫邊の名を大富道の神と毛申ゝ次ゝ泥の如ふ男神を於母

陀鳴神とやしく女神を訶志古禰神とやいひ又の名を速秋津日皇根神と也吾屋惶根神とも吾屋惶城神とも忌槌城神ともやいひ次に現形ふ男神を伊邪那岐神とやしく女神を伊邪那美神とやいひさて上はお足えふ國之底立の神豐斟渟神二神ハ共に一柱つゝ出現化朱宇比地迩神須比智迩神ハ伊邪那岐神伊邪那美神まで十柱迩神より以下伊邪那岐神伊邪那美神まで十柱独神とハいふ男躰女躰おなゝじてはあ現ら成ひ毛國之産立の神より次くに神さちをはして神よきよ世七代とやいふ今の世俗ハ天神七代地神五代と傳ふ甚しき誤ゴて古書ゴ彰て是ゴ幸ゴ

二段

伊邪那岐伊邪那美大神國土まゝ法神万物を生ふ事

ふゝゴ言皇産霊神天神多ちとは法合の上伊邪那岐伊邪那美命を免して次二柱神今より夫婦と形ち力を合きゝ試ふ國土をはゝ固むべしと作付ゝ生きれ矛を授け給ひ生バ二柱の神ハ天神の作をうけて天浮橋のうゝより立世ぬひ下のゝ戈は逆拔ゝ塩はゝ多ゝ滴乃ゝ立ゝ島ゝ荘ゝとして物乃あや免も見のゝ

有卿敬畫

あるべきとおぼしめしてこの時期ハ星さる穫矛を
以てはかきさぐりおさめ給ひ不手時国ちいまゝ
成かゝゆゝしく謂ゆる泥海のめくあるしを潮ハ
をろ〳〵（古語）ふかき所にてハ引あ者ち成ハ時手
矛ハ求より志〳〵星差る滴自然ハ凝うゝ海り
て一の嶋とおかハ生おのゝぼうゝ凝〳〵る神名を
以〳〵其名をおのゝ乃ぼろ嶋とハ二神いまゝ出嶋
ハ〳〵星ち乗彼穫矛を手嶋ハ突立て国中乃
柱とおさ殺生所ハ尋殿をハ造〳〵極ばし元
ろ〳〵もに生宮ハ住つき社成ハ生ハ突立あそ

ばしハ穫矛ハ後ハ小山とおぼしめ生ハ話伝ハ叔
伊邪那岐命妹神ハむ乃ハ生ハ汝ゞ身の生
るさまハいかゞあとハ尋あ生ハ妹神差て生
ゞ所ハ成ゝて成あハざる不一不ありとおさま
ひ生ハ伊邪那岐命ま乃為ひ乃ハ身ハ成ゝて成ハ生ハ
成あまゝる不を汝ゞ身ハ求あハぎる不ハ剥ふ
ゝぐ玉ハを生おさ和と男ふハ以の手とおさ
ひ生ハ伊邪那美命何為も生ゞ君のハ心内
まふゝとハ答ハ成乃生ハ妹神まさおさ

やう彼ら汝が今吾と汝と立てる所の天の柱を行めぐり逢ふ時みとのまぐはひをせんと契約を成汝は左よりめぐるべし我は右より巡り逢ふべしとさだめ定まりて後に妹神語を先づ言ひ後に弟神語を言ひ終りて後に婦人の形あやしく成ひとつ所に行逢ぬ時に妹神まづ先に言あげ彼に未あかやしえをとこを

神語

と言ひ終りて後に婦人の形あやしく成ひとつ所に行逢ぬ時に妹神まづ先に言あげ彼に未あかやしえをとこを

上同

めぐりあひ逢ぬ此時伊弉諾命は心あらこそむしかりけれ吾は女なれば吾より先に言ふべき理なし

理なるに汝男なるに先づ言ひ出せりこれ不祥なり改めて更に巡り逢ふべしと仰せられ吾は男なれば吾より先に言ふべしとて改めて巡り逢ひ給ふ

この時は契約も立たるゆゑ先に言ふ

男女の交合ら未成ず

男女の交合ら未成ず

を志ろしめさんと時に鶺鴒来りて尾をかしらと尾を動かすことを二柱の神は学びて遂に交合の術を悟りぬ

中代は子は出生ありされども此は子三歳まで足たらざりしかば葦の船に流す

てまつる天磐櫲樟船と云も鳥の鳥樟船とも是は未せ給ふを波のまくの

きく放ち棄のゆゑ姫次よ淤嶋をは生らゆゑ
も是をもはるゝ数よハ入き給ハ〻くて二神
は佐合ゑ給ハ今ゑ〻うむ不の子皆心よう糸
むゝ〻ゑハかゝ〻ゑ涂き謂あるゆなるゝ〻
まゝ天神乃はもゝよ到まゝゆのゝ〻をゆ上屋
ゝゝもゝとゆ天よは昴ら成年の越をはゝ
さよゆ上ゝ生て天神のおゆををは伺ら成ハ和
天神もは心よは判断ら成ゝ太兆とゆ比ゝ
御をゝて比ゝゝあゝあゝあそゝゝさてゝさよハ
是金ゝ男女の芝程よ遠ゝ女の玄笑を先ゝてた

尓申ゝよかゝ比不祥のゆハゝはゝゝゝ
まゝ立かゝ生て乃程ゝゝゝあゝゝゝあて手功
をゝゝ〻〻と行ゝ毛乃程バ二神ハ天神の位を
うけゝまゝ生てゝゝゝびれのゝゝ〻ゆ比度ハ
玉成ゝゝよ改て天の比柱をめぐりゆゆ比度ハ
妹神ハ左の方より妹神ハ右のゝゝより行ゝの
ゝて比ゝ生ゝゝ成行あゝゆゆ時よ伊弉弉命
まゝは詞を先ゝて移ゝゝあゝゝゝえをゝめ成
ゝゝゝ毛後よ伊弉弉英命あゝゝゝえをゝゝ
をゝは答ゝ成ゝて遥よは交会ばゝゝゝさて

はゝ子は出生の時よまづ淡路の穂の狭別島を以て胞とし

てはゝ子大倭豊秋津島を生ら成は又の名は天之御虫と云

虚空豊秋津根別とも申す此は門の嶋より陸奥の末まで海を隔てゝ連れる大地を云拡き

も大倭と云名は畿内なる大和一国の名よりの称なれば也　次よ

り起る小て神代より成は此島は分ひとゝ

伊豫二名島を生ら成は此島は分ひとゝ

て面四つあり手面ごとゝおのゝ名あり伊豫

国を愛比賣と申す讃岐国を飯依比古と申す阿

波国を大宜都比賣と申す土佐国を建依別と申

す次よ筑紫の島を生ら成は此島は分ひとゝ

ふして面五つあり手面ごとゝ各名あり筑紫国

を白日別と申す是筑紫の国　今の筑前国　豊国を豊日別

と申す是は今の豊後国　火国を速日別と申す是は

今の肥後国　日向国を豊久士比泥別と申す是も

今も日向の熊襲国を建日別と申す

次よ壱岐島を生ら成は又の名を天一柱と申す

次よ

対馬を生ら成は又の名を天之狭手依比賣と申す

次よ隠岐

三子島を生ら成は又の名は天之忍許呂別と申す

此島は今も在かと

ちは三島よりは次よ佐渡嶋を生ら成は又一つの

島と佐渡島とを二子よりあるは生ら成ると

の世よ二子うむのあるは生ら成ると申す

さて大倭豊秋津島より以下合せて八島

八寸初より出生ありて玉くしなる有る皇國の大名を以て世まで大八洲國とハヤハ二神ハめぐりあひをら経後まする吉備乃兒島を出生ら成ハ方叔の名ハ建日別とヤハ次ハ小豆島を出生ら成ハ又の名ハ大野手比とヤハ次ハ大島を出生ら成ハ又の名ハ麻多煩別とヤハ次ハ日女島を出生ら成ハ又の名ハ根とヤハ次ハ知訶島を出生ら成ハ又の名ハ天之忍男とヤハ次ハ両児島を出生ら成ハ又の名ハ天之忍人とヤハ次ハ小島を出生ら成ハ又の名ハ天之両屋とヤハ此の神の御子ハ合せて出生ら成る

此ハ二神の生成ふ所あらばと詔ひさて二神ハ天の浮橋に立ち國ハ海の水を乃矛をうこ探ひまさ八百万神達と世ハ中の業ハ此ハ中を以て出生成ハ古事記の序ハ是を二霊群品茲ハ伊弉冉岐命生の祖さりと記しおらの成し給ふ國のうちを出流ハ給ひ之ハ蠱乃こ涼く立ちうるを以吹ちひら成ハ時ハ此息ハ現を給ふ神の此名を志那都比古神次ハ志那都姫神と也ハ又の名ハ志那斗雄神とも也ハ天の根の令國の樹の令田ハ此ハ故ハ神とも也ハ田ハ此ハ故ハ風神ハ此ハ産ハ今大和國平群の郡ハ天ハ柱國ハ柱神社二座ハ龍田比

三段

古龍田比女神社二座とやもまたこの神の社
皇坐比古社よりも座ハ

伊邪那美命火産霊神を生給ふ事ハ
病悩の事

そ後伊邪那美命ハ来ハ火産霊神を出生
給ふ成ハ又の名ハ火の迦具土の神とも火の之の燿迦
具土の神とも火の之の燿迦具土の神とも
比ハ火の神ハ産ハ官帳ハ紀伊国名草郡ハ都
社有ハ火産霊神ハ此神の出生のゝめハ陰を焼焦
されて苦しみやゝ尤重くなるハ七日七夜
の間吾を見あつまりて嫂神ハ作上ゝ出志

むらくゝ石隔ハ比引裂給ひ而伊邪那岐命ハ
比引ゝ出給ひ而ハ申給ひ御ハ事をい始ゝ思ふくひそ
うハ比石隔のさ間ハ成ハ比うゝ比ハ出給ひ而火神
比出生給ふ事ハ比法を比やゝ出給ひ比ハ
比ハやゝ比ゝ重比苦炎ハ嘔吐給ひ
て比ハ現ハ成ハ神の名を金山毘古
神次ハ金山毘賣神とも此二柱ハ金の神ハ比
産ハ官帳ハ内の国不破郡ハ伊山金山彦神社所
之ハ此時伊邪那美命妹神ハ申比ハ
吾を比産ある事ハ申上給ふ事を聞ゝ入給

を使吾をうづひ見たまひしハいと恥しき
すなりさわを今より後ハ上の国を志ろしめ
に奉り妾ハ以下の方を治め奉らんと
たむしとおもひたまひしかハ石隠ハ已ま黄泉
平坂といふ不ましてハ誠に成なりてまたおそ
ろしくなるハ切に時命の志ろしめす国ハ心荒く
悪き子を生まして未ぬ産を続むべき神をうゝに
のこしハあれどうづ此不よりまさハ
立給ふ成水神土神天吉葛一つの俗ハ蠶と有ハ
川菜木を出生ら成ひ重ハ不生の次ハ

づハ屎ハづ〳〵ひよりて現ふ神の名を彌都
波能賣神とやハ是ハ水神ハ産ハ官帳ハ阿波国美馬郡ハ
彼都能賣神社有ハ次ハ屎ハづ〳〵ひよりて現ふ
神の名を埴安神とやハ又の名ハ健埴安神とも丹生都比
賣神とも新嘗ハ是ハ土神ハ
熟神とも爾保都比賣神とも埴山姫神とも人和国山城国那波郡ハ
ハ産ハ社阿波国美馬郡ハ迩波移麻波ハ神社有
ハさてかの石ハあ〳〵きゝの荒び高ぶる事ある時
ハ水神ハ熟土神ハ川菜を打て猶免まとハを
〳〵産ハ玉ハ成ひとそ此大産霊神埴山姫神ハ聚
て生まる神の名を雅産霊神とやハ又の名ハ若ハ魂の神

とも
ゝれ此神の御子を豐宇氣毘賣神と申し此神の名あ
まつこを豐受大神と申す登由宇気神と
もまた豐受姫命と申す外宮の御祖神と
御都神と也
神と也
宇迦之御魂神と也
大宇迦之御魂神と也
若宇迦之御魂神と也
宇迦之御魂神と也
是を食物の祖神ふ〜て後よ伊勢の國度會郡外宮
よ居給産ひ成豐受大神宮と称〜奉るハ此大神
なり又稚産霊の世この方よりこの方此神の幸
魂を木の神久〜能智神と申し次よ野の
神草毘比賣神と申し又の名ハ波夜の神ともも申し
二柱の神をあハきて屋の神ともも申し
木と草との祖神ふ〜て是を以て宮殿屋舎の事

を定め給ふ神よりの産ひ

伊邪那美命黄泉国へハ立去成ハる

并伊邪那岐命火産霊神を斬給ふる

此ものを伊邪那美命ハ火産霊神ハ出生ス時の陰
恨よりて石陰よりハ成ハひ〜を妓神
乃うう〜ひ見ゆ〜し紙いと毛孤の〜き中よ四
方て孤よ枝見國へハ立去ら成ひ伊邪那岐命ハ
是ハ涙ハ慕ひ拾ぎ〜ら〜ふ〜きとの妻命を
此ひとりの子よ背つ給ふ事ハ〜ふ〜まる
びてハ怨歎拾ぎ〜ら時よりハ涙よりて歌

ぬふ神あり名を泣澤女神とやいへり此神ハ香山の畝尾の樹本に坐しよりやゐは市官根大和の国葛上郡なる畝尾都多の本の社なりと考へ伊邪那美命ハ後に紀伊国熊野の有馬村とや所に葬り奉る比里人ハ大神をまつりしに花ある時ハ花を折て奉るとて籤をさて鼓をうち笛をふき紙をうちひて祭ると世俗ハ又一つの比喩なるべし出雲の国と伯耆の国との境なる云てとも伝へたりさて此ハ誤なるべ紀記とも崩御のさまを記されあるの確説なり祝詞題真の古伝ふることなり先輩有ふ伊邪那岐命ハ此ハ多くてハ憤やゝ

ぬるつるぎ佩ふつるぎを抜て火

産霊神を三段に切放ち成ふ時ハ刀の刃より走る血多くて里上りて天の安河原にとゝ神あるる多くの磐とおるゝ所ハ貫ハ刀刃の鋒に生たる血なりて生りて彼岩むらにそゝぎきつきゆそゝぎて現ふ神の名ハ磐裂神次に根裂神とやいへり此神の子を磐筒男の男神次に磐筒女の女神とやを是ハ経津主神の祖神なり此産ゆゝまる手ハ刀の潭ちり走たる血もゆゝたばしりてこの時現ふ神つき是ゆゝりて現ふ神の名ハ甕速日神とやいへり此神の子孫

熯速日神と申す是ハ建御雷神の御祖神に坐
せり。さて此時御刀の血かくたばしりて其ゑ
木草に染つきたるを以て木石の焔のぼ
りし火をふく〳〵と伝ふ。次に甕速日神を
斬給ふ御刀の名を天尾羽張とも伊都之尾羽張
神とも稜威之雄走神とも申されまた三段
に成れば甕速日神の御躯に現まし給ふ神あり
其二段に現れ給ふ神の名は天雷神と申れます一
段に現れ給ふ神の名を大山祇神と申れます一段
に現れ給ふ神の名ハ高龗神と申れき都合て三柱に

座しぬ。又一の名を伝ふに八山迦具土の神の御頭に現まし
あらふ神の名を正鹿山津見神と申れ御胸に現まし給ふ神
ふ神の名を淤縢山津見神と申れ御腹に現まし給ふ
の名を闇山津見神と申れ左の御手に現まし給ふ神
乃名を志藝山津見神と申れ右の御手に現まし給ふ
神の名を羽山津見神と申れ左の御足に現まし給ふ
神の名を原山津見神と申れ右の御足に現まし給ふ
神の名を戸山津見神と申れ又大山積神ハ又大山名
あ神ハの名をて八戸掛山津見神と申れ是大山積神の子を高
えて大御祖命大山咋神も大山津見神も言はれ此大山都見神野推
水上神と申れ又水分神と申れまた此大山都見神野
神と二柱山と野とに持別て八柱神を生
成給ひし名ハ天之狭土神次に國之狭土神次
に天之狭霧神次に國之狭霧神次に天之闇戸神

次に國の門戸神次に大戸惑子神次に大戸惑女神とナリ

伊邪那岐命黄泉國に至りて妹神に逢ふ事

古へに伊邪那岐命の妹神の古別を慕ひ給ひて黄泉國まで尋ね行給ふ時伊邪那美命の居給ふ殿の騰戸より出むとしたまふに成に對面の上に相かゝり有て伊邪那岐命に汝ひとりなれば妹命を慕ひ〳〵思ふがあまりみづから此所まで入来りぬ

吾と汝と作り造るべき國いまだ成とゝのはざるを如何ぞ不あまたばやきと共に立帰りなんとのたまふに妹神答て曰くいとくちをしきひけ給む妹神答て曰くいとくちをしきなるを歎るに我なれ今おしむやく入来りぬるゆゑ黄泉の國の屋敷きに妻をもでる夜見の汚きくる竈の食をりたまひぬ岐命の〳〵所にまでも入来りぬるに多くの人民を産ばゆゑまれ〳〵八思ひ侍る形生ばかりにはまだ産〳〵与冊都神とおもふ屋〳〵を間必吾を見のあるべきのゆゑと作れるの殿のうちへは

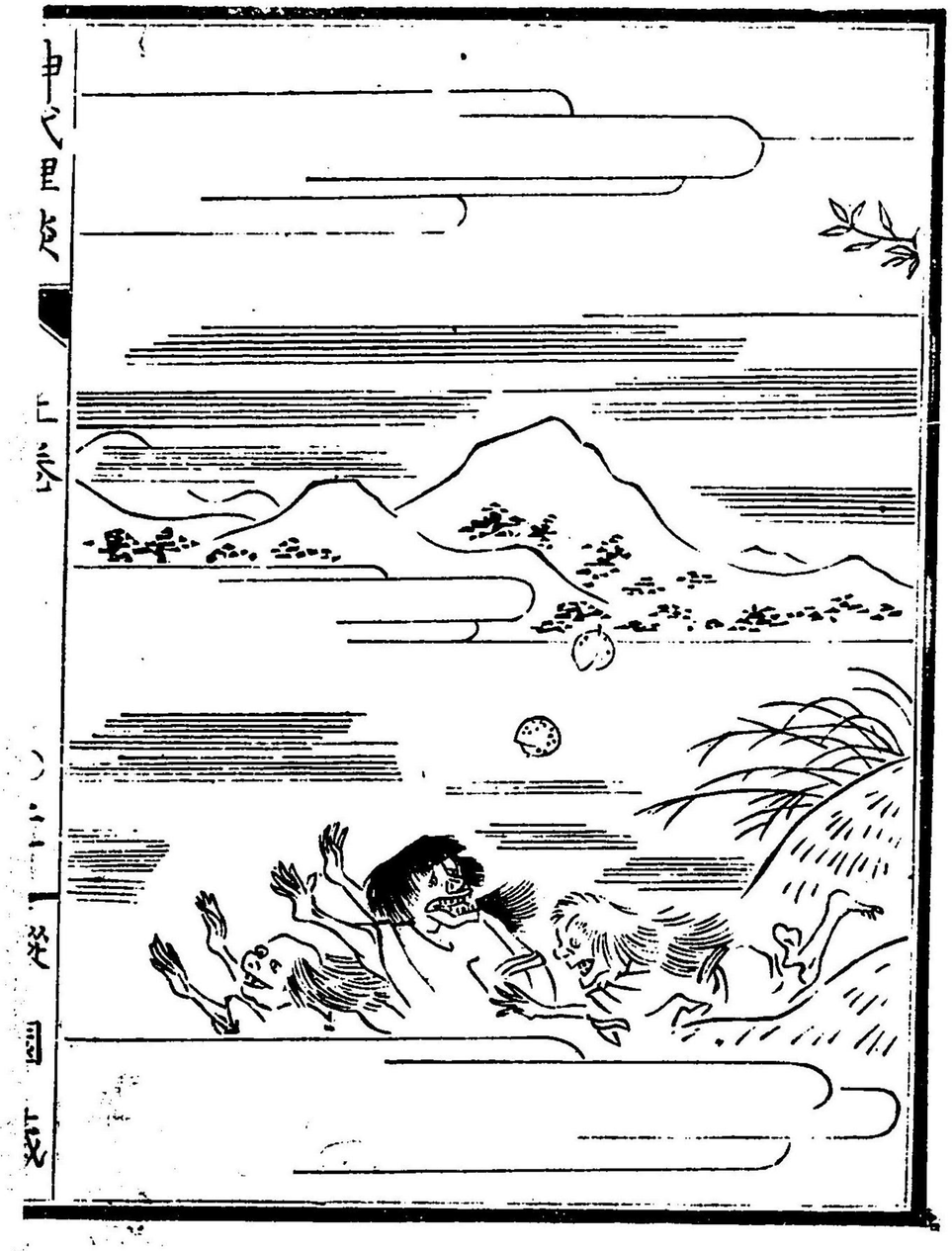
入給ひ、しばらく経るよ妹神八重垣ほどの久しきを
はまちうの宮殿はの殿のうちを窺ひ見ゆるよい
とくうるはしきび玉を左の肩に繋はさしかけ来れば
はゝの男柱ひとつはこのきとりら来るを一火の
を火もてうかがひ見ゆる人ぞ妹神の腕は蛆
わきとろけて八ツの雷公魔女八人の手傍は埋
ひて寄居るを妹神を離れを捨てて吾思ひを
かくれおき国よ来ることは難ばして手所
を函出ゆふを時伊弉諾英命かゝりゆひ恥
みて妹神よ行ふ逃ゆふハ何ゆゑさ行よ中した

黄泉河を出用ゆゑ吾よ恥をバ見ゆふや天
まで上るの時を出産とは上ハ吾もまゝ天の情
を見ずと行ふ逃ゆふ伊弉諾命をまゝ加か
しく思ふ手所をいで行ふ行ふ行ふ時
だゆゑは行ふ拔ばさ族離ゆ手族はまけど神語
と行ふ逃ては唾を拔ばし時よ現ゆふ神の名
を速玉の男神と中ハ次はこの法様を出掃ひら成
い時よ現ゆふ神の名を与毋都事解之男神と中
ハ又の名ハ大事戒男神とも中ハ今の世の人狩一火をとゝ
事を忌ハ中ハ此時の故ゆゑ記ハ中伝ひうく

て伊弉冉尊今八稚毋都醜女又稚毋都比醜女とも八人を
率ハして時神を追ふて行さをみふ伊弉冉岐命
佩刀を佩せられ十拳劔をぬきて後方を振
て逃去給ひおのゝ命頭の黒き鬘をとりて投
棄給へは其ハ蒲萄となりて實
を むしりて喰ふ醜女ども其實を取くらひ喰ふ
間迹のびらの命ハ醜女どもハ喰ひ終てまた追
来ハ神名まさ右の命髪ハ櫛をさしらの命ハ櫛を
とりて投棄給へは竹の子ハ忽ち筍となり
ハ醜女どもまさ竹の子をぬきくらひ喰ひ

孫ふ終てまた追来る時ハ伊弉冉尊ハみづか
ら追来るを見て時伊弉冉尊ハ既ハ黄泉津
平坂まで逃給ふを見て桃の木ハ
ゆゑ須佐男命ハ桃の実を三つとりて投棄
給へハ醜女ども色ハ失てこゝを逃うり
ぬ伊弉冉岐命ハ桃ハ汝今ハ我を
助ケしごとく世の中の人民どもの艱難ハあひ
て苦しむるあらゆる時ハ我を助くるとて行きこの
ら迹ハ大加羊豆美命といふ名を付給ハ
しハ是ハの世ハ桃の悪鬼をふせぐとゆあ

源正母謹画



るハ此神之子に在ひまさ狭橋をなくるゆを忌
ひも去の濁なを重ひ此時伊弉那岐命
ハ千人をうるまて引べき祓の大岩を以て黄坂
路を塞ぎ絶ち成て大岩を間さて伊弉
那岐命と向立むとひ給ひ成ハ支婦ハ離縁の作業
をはらてはバしひ尽を古語よりて云ふ
ト伝へひを時妹神ハ
ちご妹命ハ
乃志ろしめ国の内の人民を吾一日ハ千人
絞殺さむと作ふ多くバ妹神の作業ハ

ハハーきりぐ妹命かく為たまふ吾ハ今より
一日ハ千五百ぐのまを産を為て作ふ
ひより出ふへ為る事なるとて指ひ
杖を投棄ふ給ひ世ハ世中ハ死ぬる人一日
ハ千人あれバ生ふ千五百人ありと言
諸の神ハ手を空ハ時ハ伊弉那岐命ハ
さ知ハ妹命を加ふ暮ひるハ皆わふ
ろの撫き方ふと伝ふ色々ハバ伊弉那岐命
諸冊教道者ま菊理比咩神ハ詔ひて
さ一先ハ知と妻とを産む国をうこ伝ふ

りゝの神を生まゝまさ男の物を生まりけう
爲は妾何ぞ又子をうむを欲せんやされば妾
は此神の御兄なるとゝ雖ども伊弉諾
尊ゝ怒給ひ伊邪那岐命うれを打こゝ先ゝ大な
此国を治賞爲に成つひなは五ゝ重所を生ま
ちゝ尊姫づゝに生給ふ芙蓉半板とゝ所は今出雲の
国の伊賦夜坂といふ所なりとゝ傳へいはゝ
うる此ゝのあゝしまゝとりて伊邪那岐命を芙蓉
大神と名ゝまゝ進きみひゝまゝとりて道
數大神と名ゝまゝ時伊邪那岐命の杖

杖成ひ此杖をとりて現あゝ神の名は來名戸祖
神とゝ此數戸の神とも衝立船戸神とも
坂をは塞ぎ成ひ千引の大岩を道反大神とゝ
數の名は塞坐黎泉醜女とも此久那斗神
三柱を合きて世を障の神とも
神を塞るゝあるを障塞きて
へ入來るを障塞きて
りまべて世の中のあゝしきゝ
死りまるゝ
死ぬは產ぬ

伊邪那岐命穢原にて禊身祓のこと

長日神月神は出現乃事

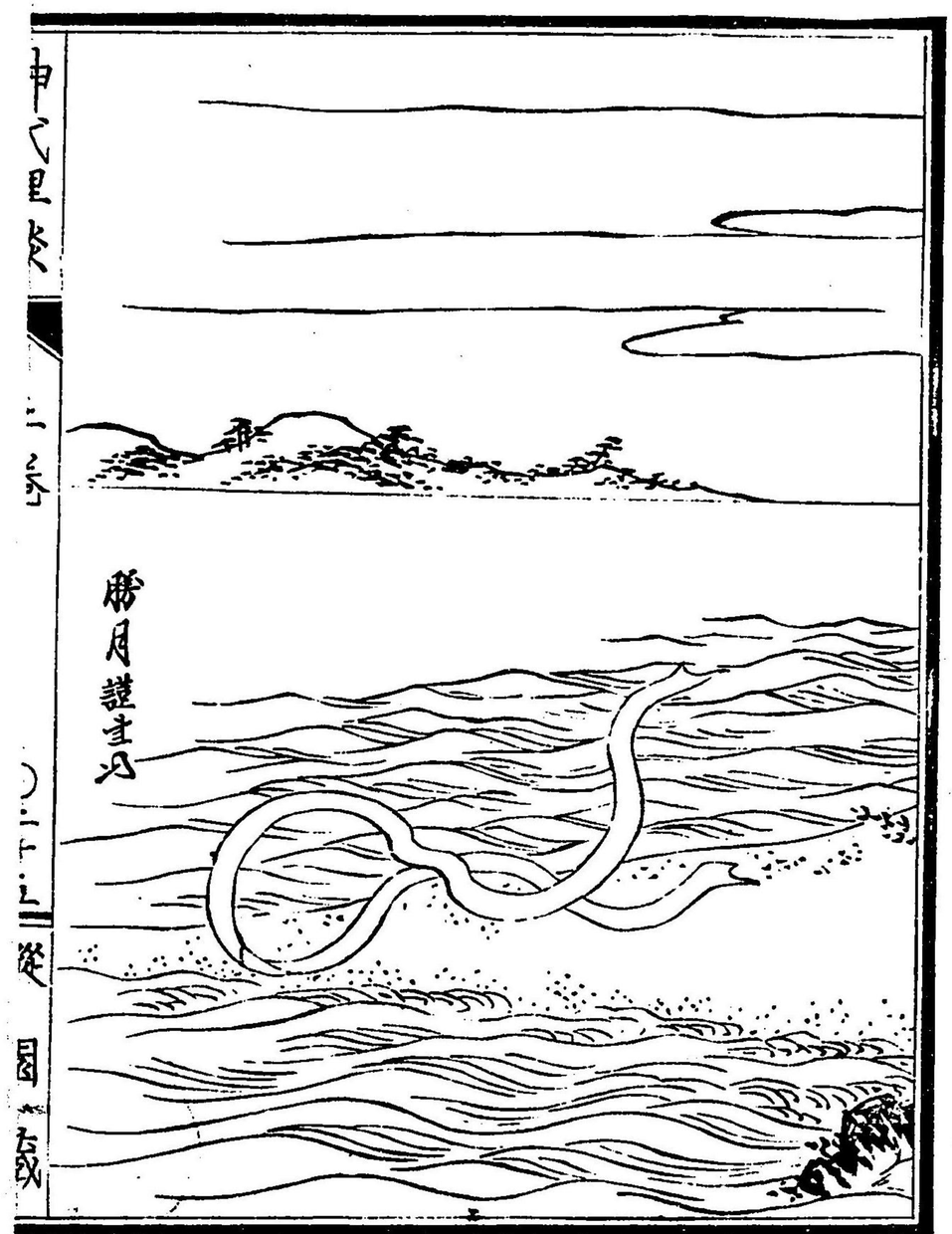
伊邪那岐大神は夜見國より帰給ひてさ

一方をは後悔かされ又ものもきたるべき汚穢をは
別されをは拭身の穢を滌ぎ去べきあらべのうち
ぶと名をは身禊祓べし穢を去ものとあを
成果の水門まく速吸名門などいの所を往あを
とてのは免あるべしこれ正の水門八潮ぬ所はど
はやくては此よ叶ぬ夫より飽栄の日向の
橋の小門乃阿波岐原と云所へ行て祓を身
禊の祓をば一とてまづこの所を見出へは穢ら
然ば時は身は是ら成は是此紙はとり拭ら成
はめよは帯をは投棄ら成は所是よりて

現ぬふ神あり名を道長乳歯神とやはり叙の名ハ長道磐神
とやはも次よは衣をは投棄ら成は所是よりて現
ぬふ神あり名を和豆良比之字斯能神とやはり又
名ハ煩の神ともやはり次よは褌をは投棄ら成は所是よりて
て現ぬふ神あり名を飽咋之字斯能神とやはり又
名ハ開齧神とも次よは左乃は手よは洗のぎ清は手纏
をとりては投棄ら成は所是よりて現ぬふ神
所の名ハ奥疎神次よ奥津彼藝佐毘古神次よ奥
津甲斐弁羅神とやはり次よは右の は手よは洗ぎ清
は手纏をとりては投棄ら成は所是よりて

現ある神あり名ハ速秋津彦速秋津姫次ハ速津甲斐羅羅神と申し合をて九柱ハ是
を始ハ身ハ若干成れものを脱きて行成れ
ものをて現ある神ハ名ハ速秋津彦時伊邪那岐
大神ハ吉水門をとくとハ清じて上の瀬ハ瀬を
やきを流り下乃瀬ハ瀬を分流りと伝
ら来て中の瀬ハ下立行成瀬を落てハ身の穢
をハ清ひ行成ハ時ハ息ををて現ある神の名
を大禍津日神と申し又の名ハ八十柱津日神と
も天之麻賀比都神とも申
此神ハ穢見国へ入らせらるを探ハ

てまた現ある神ハ庭ハ次ハ吉禍を直さむと
行成ハ時ハ息ををて現ある神の名を大直毘
神と申し又の名ハ神直毘次ハ伊豆能賣神又ハ速秋
津日神と次ハ鳥を始あるハ行成ハ時ハ現ある
神の名ハ速佐須良姫神と申しあハせて四
柱坐りて瀬の底ハ沈ハ行成ハ時ハ息を
をて現ある神の名を底津綿津見神次ハ底筒
之男命又の名ハ底土之瀬の中ハ綿津見神
時ハ息ををて現ある神の名ハ中津綿津見神
次ハ水筒之男命又の名ハ赤土之瀬の上ハ清び


勝月謹主人

於成ル時に息吹より生て現ある神の名ハ上津綿津見神次ハ上筒男命又の名ハ表筒男命又ハ底筒男命と申奉る神とあハせて六柱ハ住吉三柱の綿津見神ハ阿曇連等の祖神として齋き祀る筑紫の志加の大神是なり官帳ハ筑前国糟屋郡ハ志加の海の神社三座と申すハ此社ハ住吉の子を宇都志日金拆命と申奉る名ハ豊玉毘古命ハ稚綿津見神又の名ハ豊玉彦命と申奉る是ハ安曇連凡海連海犬養阿曇犬養などと申ハ氏ども共祖神ハ此ハ住吉三柱の筒之男神ハ津守連が齋祀ル

る墨江乃三前乃大神ハ住吉ハ官帳ハ摂津国住吉郡ハ住吉の郡ハ住吉の神社なり社四座と申ハ此社ハ住吉の郡ハ住吉の郡ハ住吉の神社なり社前の郡ハ住吉の郡ハ住吉の神社なり皆此神ハ住吉ハ 次ハ左の御目を洗ひ給ふに成ル神の名ハ撞賢木厳之御魂天疎向津比賣命又の名を天照大御神と申奉る次ハ右の御目を洗ひ給ふに成ル神の名ハ月夜見命と申奉る次ハ鼻を洗ひ給ふに成ル神の名ハ建速須佐之男命と申奉る 合て二柱ハ住吉ハ須佐之男命と申奉る

まよりほのぼのとして神
まと坐まれこと先輩の考説動くべからにさて上
乃大禍津日神より以下速須佐之男命すでに産
て十二柱の神ハ皆をはそゝ紀訪成ゆまらめ
ては出現訪成ゆ神あちまは産れます　右まゆは
神々ちよりうちハ十柱津日神ハ又の名ハ大綾津
天照大は神乃荒は魂ふは産ゆ神直日神ハ名さ
は神乃和は魂まは産ゆ次ま速秋津日神
もゝれと次ま妹速秋津比賣神は二柱ハ水戸神ま
は産ゆ速佐須良比賣神ハ速須佐之男命と力

をあハきく坐まゝ神ゝは産ゆ重潮織津比賣神
氣吹戸主神速秋津日神速佐須良比賣神四は
ゝハ被戸神と中ゝ其速秋津日子神と速秋津比
賣神と二神河と海とりよりて持別て生成ゆ
宗ゆ神の名ハ沫那藝神次ま沫那美神次ま頬那藝
神次ま頬那美神次ま天之水分神次ま國之水
分神次ま天之久比奢母智神次ま國之久比奢母
智神合皆て八柱まは産ゆ中ゝ屋て上の一條ゝ身
禊被の記原まは坐ゆ

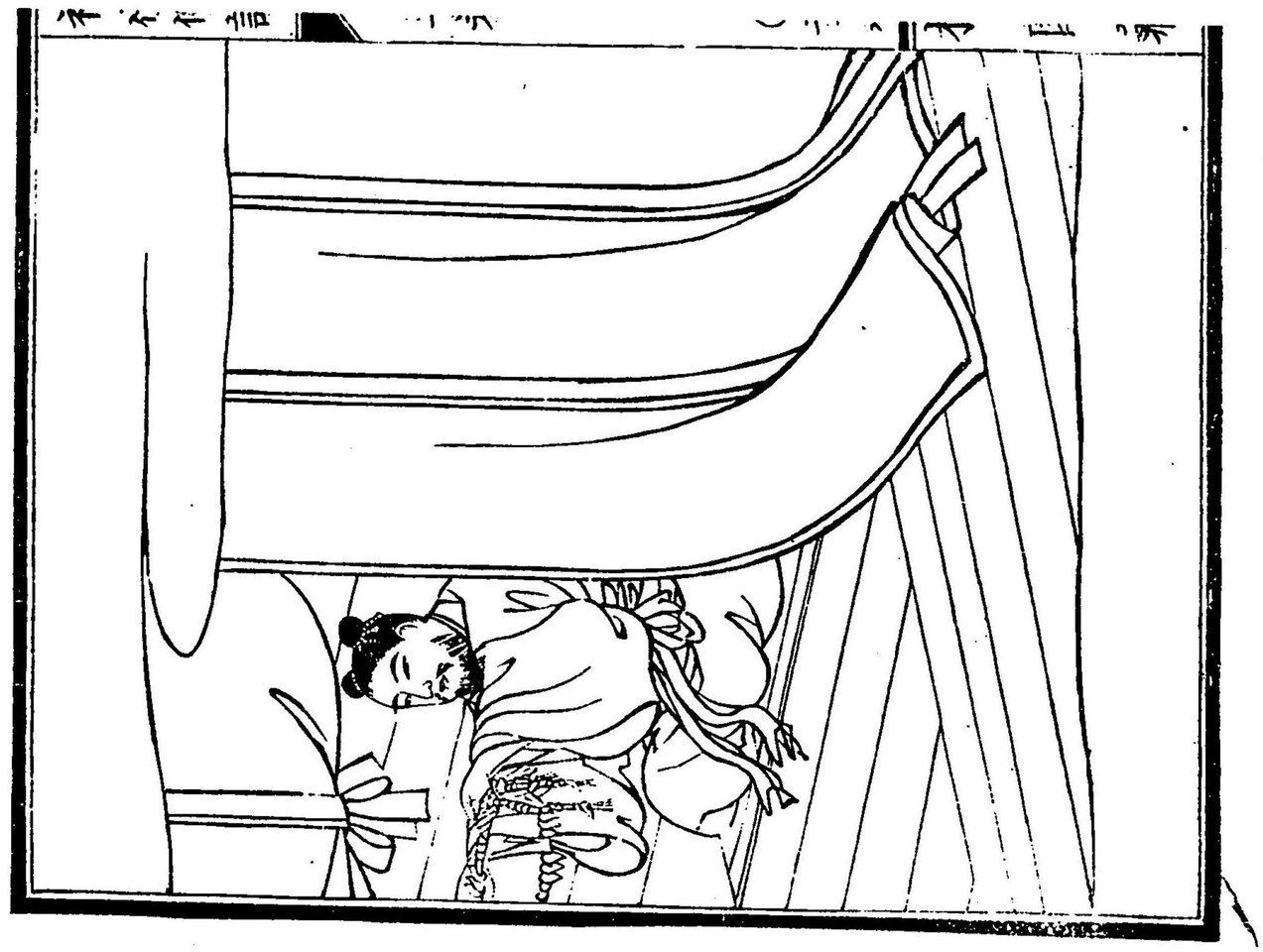
伊邪那岐大神二柱乃貴子の志ろしめ

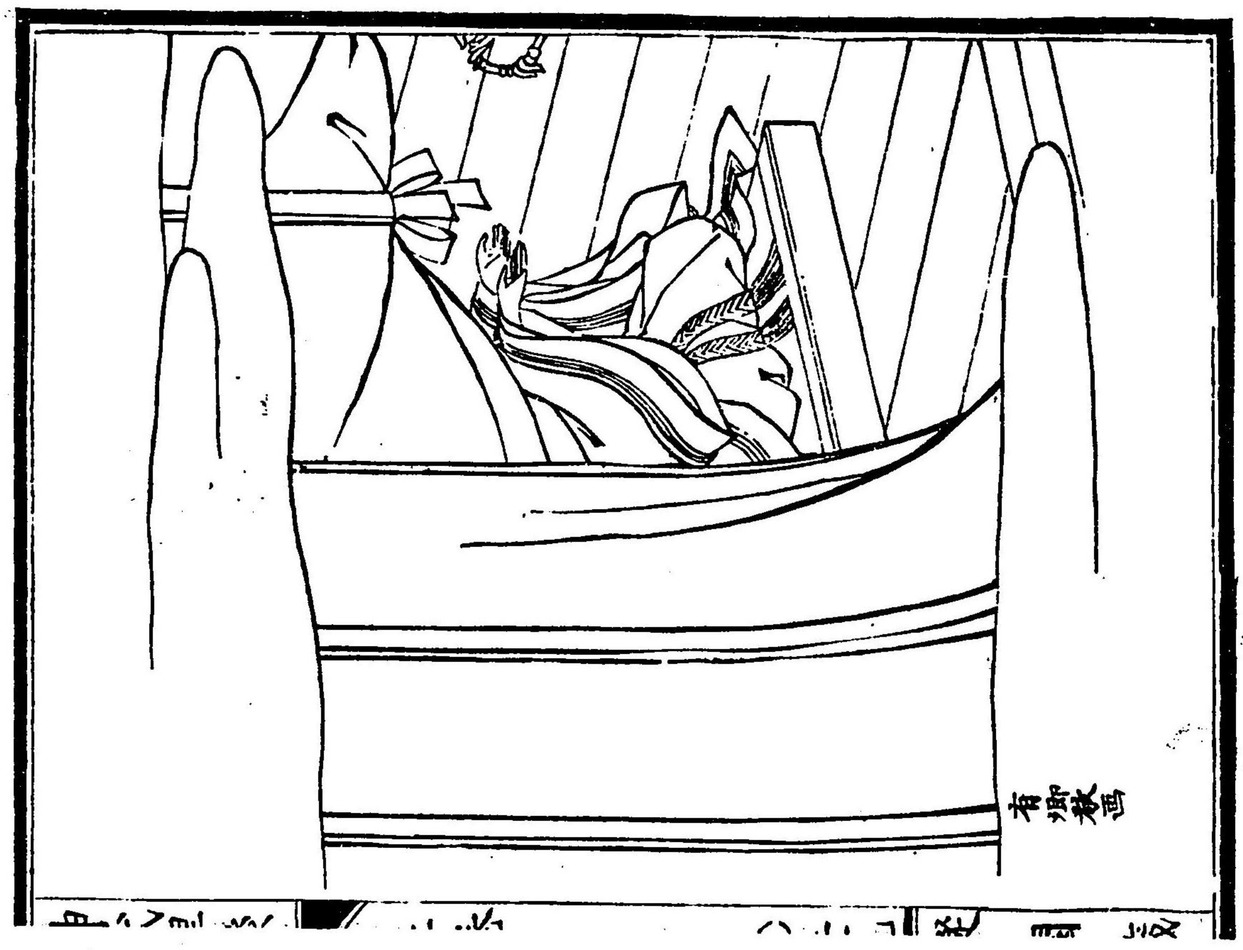
段

生屋き國を作定めらるゝ事

伊耶那岐命は禊はらひてあまくだりたまふ時に子を
はらむ成柱ゞ一けふ中に天照大神と須佐之
男命とのみ生質を見そなはしてそ生る子あり
多生るて生る時に御身より清かる時貴子をはらむとき
まひて此よろこびたまふ事そも〳〵言天
照大神と申るは生なるゝ時に身の光を
うふ事〳〵して天地を照徹たまひけるは父
命わが子多くあれども かく不思議に奇き子
はあらゞ是は此国をとゞ知るべきよあらゞ

と宣ひて其に頸玉の緒を
神〳〵と取神〳〵ふり振ひて（手に頸玉の名ハ倉板挙之神と）
ト天照大神に授給ふ時に授給ふ事ハ
ふハ汝命のひとりを尋ぬる宜しく言天原
ハ君なる所〳〵と作定めらるゝ此時天と地と
離れ事ハ事ハ事ハ
以て天上に送上給ひ此時に天照大
神ハ神ハ父命の作をうけ給ひて言天原を治
しめ〳〵ぬふ次に健速須佐之男命もまた生る
がらに母の命のあり生日に神に垂てうるはし




有卿秋画

且われハ汝命ハ青海原に治めの八百重を君なる
べしと仕定めなり給ひ青海原の八百重とハ
語なて我るなり給ひ須佐之男命ハ髭ハむかき給ま
で生下りの神なり給ひ故に須佐之男命の性
質ハ成ひ悪を傾しなみべきなるなり考なる怒
をむづかをなみ手むけうをなみの時か妻山枯も
泣枯して枯山となり給ひ河海をもかれとく枯泣
軋ち成ひまゝ手ハ性質ハ勇悍なて人民を苦なる
事多く傷害を蒙をるをハ伊邪那岐大神ある時
須佐之男命に仕ら給ひ汝何神なるをもて

按ずるに悪を治る事を忍ばしてこの生長に及
ぶまで怒をむけるやとハ為あるべしこのハ須佐
之男命の答に吾ハ母命の住ませる根堅国へまゝの
らむと乞ふ意ありこの申ス言に泣ひたりと中給
ふ是によりて父命ハ怒甚しく云うハ汝ハ
此国に住べからず汝をして此国を治め
し免ず人民を殘傷る事多の者ゆへ心の清き
根堅国に申く居しと給ひ此ゆへハ須佐之
男命志うハ手由を是ハ姉の命天照大神に
是告申て永く清うり去居しと給ひ居ハ

法父命たまはくしめて法許容あり乃ち姉ハ須佐之男命ハ雲霧をあらしとぶりて言天原ハそは昇ぶ成りなりさて伊邪那岐大神ハさぶらふ天神の作をうけ給はりて此國土を造固め堅まひ種ぐの法功ことくしく法然なるに天ハ昇て天神ハ此報命仕上ることやがて日乃少宮と下所ハとく海原ぶ成り此國ハて海の多賀まる淡路洲ハも坐まはしよりて倭へ官帳ハ近江國神社淡海國ハ名郡ハ淡路伊佐奈岐神社と中ぶ此社ハ大神ハ川て天地ハ往通ひぶ成ひ幸まひハ梯を法作垂ぶ成

手名を天梯立と中乃法ハらの梯立ある時大神乃ハよく法窠入ぶ成りるる宮小倒伏乃きバ大神を時ハ是を怪しくくびなる事なりとぶくまひしをを手を以を久志倭乃濱と中ハ今丹波国ハ有久志倭くの濱是なりと法倭へひ

天照大神と須佐之男命ハ誓の事

須佐之男命天ハ昇ぶ成ひ時国土山川是ぶ為ハ昭動ぶくしひ是此神の法勢の猛く而らきぶ故なり天照大ハ神を由をきくこと一大ハ法誓ぶ経ことの弟命の天ハ上ぶ来る由を聞ハか

あゝ悲哀心よりいるゝ爲てわの天國を奪
まむとは下心なるへしやき女神なるといへど
毛何ぞ是ゞ爲る父命の授ぬひし此國を逃避べ
らんやとはゝひて壯士はづきは倭をぞ拔
ぎ〳〵るまゞ手はよそをひハ髮を解て髻
を纏ひ玉敷は裳をとる捕ひて袴とは成
左右乃は髻は鬘まゝ左右の手まきおあ乃
八尺勾聰乃五百津爰頂麻流の珠をは手もち
玉敷は背まハ手入まゝ五百入乃靫を負ひぬひ
は臂まハ伊都の高靫を佩きゝ弓を振あて

は剱乃柄を握り堅庭まはちゝ足をふみ
い出ぬひ沫雪はゞ〳〵蹶ちゝてはみゞうゝ
お迫ぬひ伊弉を怒らしてはまひけるハそゝの
弟命ハ何のあまよ父命の授ぬひ國を治めむる我
思ハゞ〳〵てわの天國へハ上来るやと責とひ
給ひ乃ゝまバ須佐之男命は答まよ某ハ何
きゝ事〳〵父命わゞのむづうるあを問たを治
ふ時吾は母命乃住ぬひ根國へ申うむと思ふ
ゞゆゑまかゝ泣れ彩りとは答申へバ父命大
まよ怒らゝ經給〳〵ゞ汝ハ此ほまよ住るあるゞの

らびとけさまひて吾を逐ひ去るべけむふこの
神名よひと度姉命よも告あ〳〵きて後よ永く退
去ヤに参くありて重者をふとわ〳〵皇者く罪来
いたり強るよさか〳〵ざり況姉命のこゝは猛立
有参しとハ某まおいてちゝよ異心なしと伝諸
らきりわれども天照大ハ神ハなホハ疑ふハ時ふ
ら成強〳〵バ汝ぞ清〳〵ろの清く明〳〵なるるハ
何を以清稜とき参きと作られるきバまるハ参
ヤ上ゆひけるハ姉命物そきぞ〳〵が心をハ疑あ
らバ今茲まお乃〳〵誓をいきゝハむを誓の

中よ名子を生成てアゝの明なる心をあゝきゝ中
き私として天の安河原といふ所まて川を中よ座
ざて〳〵向ひ立ゆひハ誓をなさむとする時天
照大ハ神ハきまひひるるを以誓乃中よ汝が生所
乃子男子なゝバあゝき心ハ清稜と参しを
し女子なゝバ黒心よあゝびと定めむとてまゞ
ハみぞ〳〵命乃佩ぬふ十拳剣を色とりゆふ
色を三段よ折て天真名井とヤハ井の水まさ
ゆハかゝ砂成吹棄ぬふハ息よりて現ぬふ神
天傳名井とハ武来ハ振きゝぎ砂成それをハ口
の名井とをいふ

の名ハ多紀理比賣命次ハ狹依毘賣命次ハ多岐
都比賣命あハせて女神三柱ハ筑紫ニ成ル次ハ
速須佐之男命ハ天照大御神の左の御髻ニハ纏
ひ給しの八尺勾璁乃ハ統乃珠を乞とりて由
ら〳〵とゆすりならし乞成天の真名井ニ振ハ
すゝぎ乞を噛て吹棄ニ成ル御息ニ生てまゝ
ハ男子ハ一柱ハ忍穂耳命と名付る次ハ右の髻ニハ纏
ひ給しの御さ〳〵わを搖さゝやかに成ル須佐之男命ハ母
ゝりの小櫛さ
ゝり乞ハ子ハ名を正哉吾勝速日天之忍穂
耳命と名付る次ハ右の髻ニハ纏ひ給しの

統の珠を乞とりて乞を噛て吹棄ニ成ル御息
によりて祝ぬ神の名ハ天之穂日命官帳ハ山城国宇治郡
郡ハ備前国高草郡出雲国能義郡ハ天穂日命神社有し次ハ髻ニハ乃と
ひ給しの御統の珠を乞とりて乞を噛て吹棄
ニ成ル御息によりて祝ぬ神の名ハ天津日子
根命次ハ左の御髻ニハ纏ひ給しの御統の珠を
乞とりて乞をゝのみて吹棄ニ成ル御息によりて
祝ぬ神の名ハ活津日子根命次ハ右の御髻
ニハ纏ひ給しの御統の珠を乞とりて是を噛て
吹棄ニ成ル御息によりて祝ぬ神の名ハ熊野

久須毘命（大隅の命とも熊野櫲樟日命とも申す）あり
男神五柱なり。まづ天照大神を
じめて命の尊とまあり。紀伊国を志摩
し給ひてより、まひろ多い後は汝の生成る
五柱の男子は手力男命いはとのまの命
殊なる事なく択きさかはおのづから
先づ山の生成る三柱は女子は手力男命
この佩ける十拳剣にて現色金精が化りづの
ら汝の子なりと宣ひてこれ大は神ぞ世に裏身
はしるをさきに現ぬる三柱は女子のうち多

紀理毘賣命は奴の名は田心姫
古語拾遺は成れる胸形の奥津宮
狭依毘賣命は叡の名は市杵島
古語拾遺は成れる瀛津島比賣命と申す次に
多岐都比賣命は叡の名は湍津
ふ古語拾遺は成れる故に奇へ津島比賣命と申す
形の君等が祭る三前の大神と申す
是なり宮崎縣の前の宮縣の那の宮縣の神此三柱の
女神天より降社成る紫の峰門山といふ所に
まします時書き玉を以て奥津宮の方に

に由置注成八坂の紫玉を以て中津宮乃方ふ
に由玉放索八咫鏡を以て宮へ乃方ふに由
玉ら成る神體として三つの宮ふ納おきていた
ひめひるめふ此地を身開郡とハ中ハ又て乃三
柱の女神さち豊國乃宇佐島ふも由結産社宗ハ
官帳ふ豊前国宇佐の郡ふ比次ふ由お現社宗ハ
奏の神社と中ハ名ふ比
柱の男神ハ中ふ正哉吾勝勝速日天之忍穂耳命
ハ根の命と毛天の忍穂耳の命と毛中ふる天照大由神
ふとふ由羅生拾ふ多ふ由みげうう由腹ふ腹
きて由養育拾む乃ふる比由子を腹ふと神

の由女天萬栲幡千幡比賣命又の名ハ栲幡千幡比
奏の命と毛萬幡豊秋津師比奏の命とも萬幡秋津
師比奏の命とも毛中ふる乃
子玉依毘賣命に娶て生ふる神の名を天照国
照日子火明命と中ハ又の名ハ穂の火
の命と毛中ハ此神天道日
女命に娶て生ふる兒天香山命又の名ハ天の香
ハ是ハ尾張玉造尾張連丹波国造石作連丹比連
稱多治比宿祢蝮壬部首丹比周敷連博士連など
中ハ氏ど毛の祖ふ由在ハ次ふ天穂日命又の名
起埼の命と
も中ハ乃兒武夷鳥命叔の名ハ天夷鳥の命と毛
武日照の命とも武三熊の命

と毛武三雄の大人ともヤレ　兄ハ出雲國造おそ臣土師連菱系
宿祢秋篠宿祢滝津國造武蔵國造相模國造大伴
國造伯耆國造菊麻國造上海上國造下海上國造
安房國造伊甚国造新治国造高國造豊國造二方
國造などヤレい氏ども毛の祖ハ産れ次ハ天津日
子根命の児天麻比止都根命又の名ハ天の日ゴ筒の
命とも天の久斯麻比
賜ヒ立天の忍穂の命とも天の久し
假治乃祖神ハ産れさて比天津日子根命ハ犬
上縣主甫生稲置茂田首乗名首額田祖連額田祖
湯坐連三枝祖造言市縣主奄智造凡河内国造凡

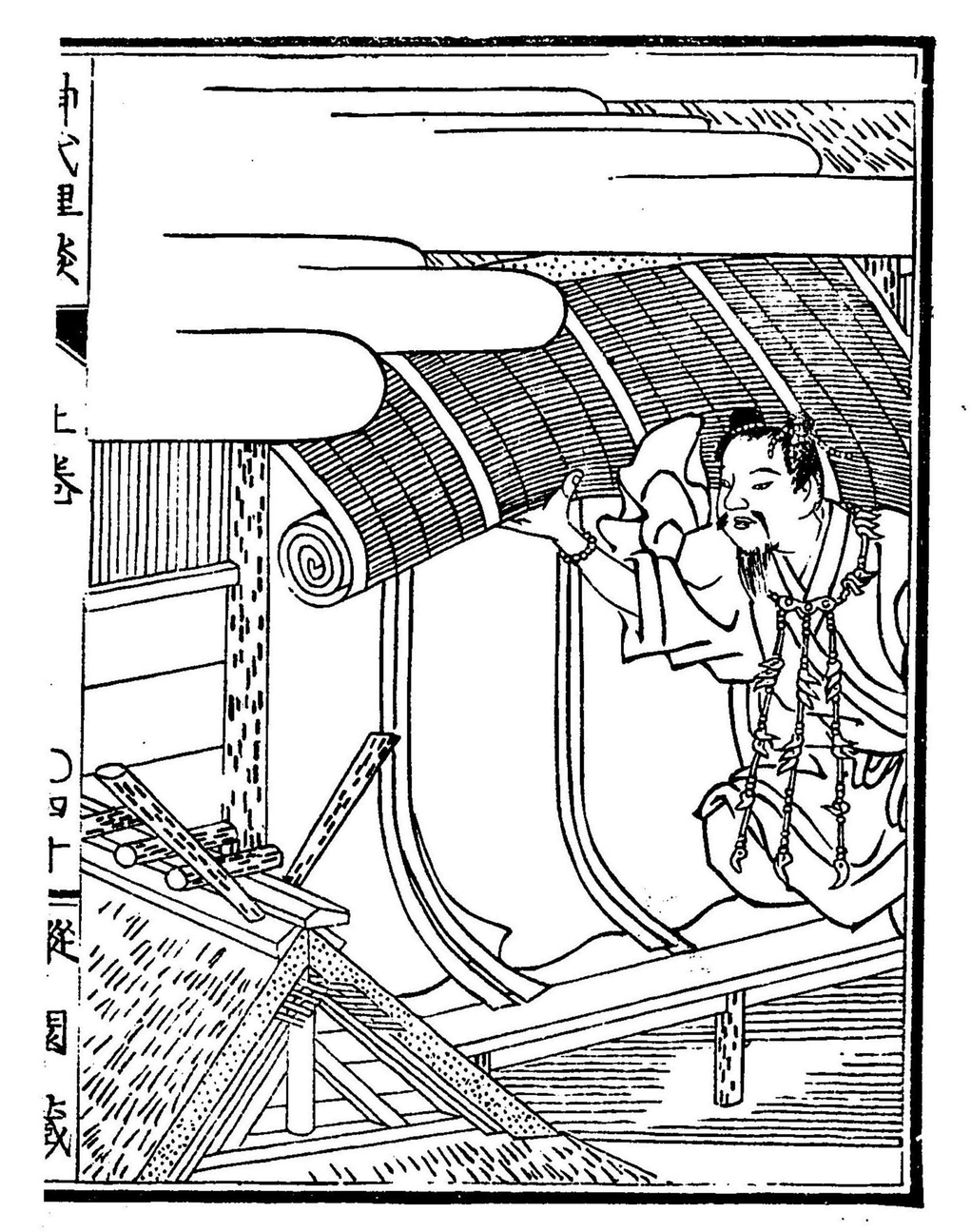
河内直津国造山背国造山背直駿城国造駿河国
造菊多国造周淮国造馬来田国造阿波国造
国造周防国造などヤレい氏ども毛の祖ハ産れ
須佐之男命ハ
天照大神ハ須佐之男命ハあ〻ひなき事
を志ろしめしなバ
ら我ハたちかうハむつ国〻ハ勢ら我ハ
ある時大神ハ須佐之男命をめしてあ〻系の中
国ハ字氣毋智神と〻ふ善神あり汝ハ
汝ハて事虚実を見て事るべ〻と作給られ

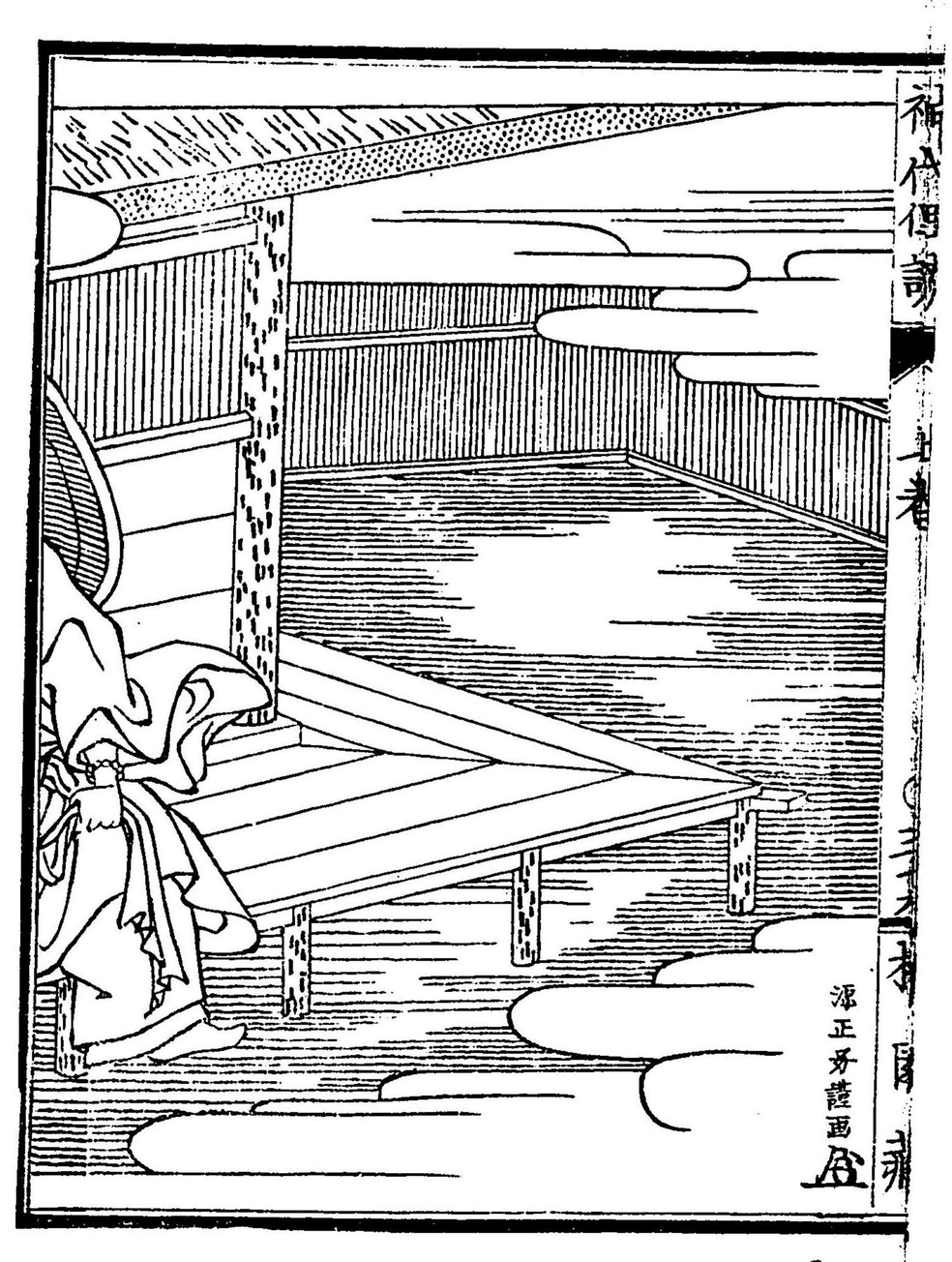
を須佐之男命ハ伺をう奉て天より降来りて宇氣母智神乃毛宇賀ハ殺ハ尋ぬるとハ食物を出神ハ口ゟ出ハ宇氣母智神かしこ侍りて口の中ゟ鼻口ゟ尻ゟ種々の食物を出して大きなる机の上ハ作なら屋ハ侍ハ食物中上ゟひらりけハ須佐之男命ハやくを立さ屋を うかゝひ知ゟひ乃給ふ大ハ腹立給ふ様ハ きなれ尻口ゟとより取出しなる汚物を以て吾 をもてなさむとなるやと侍さまひて出給ふ 神を接て立ととろハ此神を殺害ハ成さて天

よかへ星界ゟひ大ハ神の御前ハおかて侍ふさハ 其ありさまを伺上ゝ給ふ乃ハ天照大神ハ機 嫌甚あしく汝ハあゝ何しき神ありやを知ふ足 るゟを欲さゞと宣ひて出給ふ須佐之男命を ハ遠さけ給ハしゝ志げく国ハ逢もなりりあを 後大ハ神ハまさ天熊之大人と以ふ神を以て弟 たゝび宇氣母智神のあるやうを足屋求るべく と伺給ふ給ふ給ふ下星ゟる而此神ハ国ゟる已 ふ才まつの仏星但しを軀ハ生しまる毛ハあり額 乃上ハ粟を生し眉の上ハ蜜と菜の木とを

生ド眼ヨハ稗を生シ腹ヨハ稲種を生シ陰ヨハ麦大豆小豆を生ド頂ヨハ牛と馬と成き り天熊人を以て人を悪く取をさめて天ヨ指すく星天照大神ヨリ高き ハ大神ヨ神ヨの外ハ貶ひ拙いさ也此ハ人民の喰ひて性命を為もつ屋き ものなりと宣ひて手形ちち栗稗麦豆オを八畑の色ちとハ定め形成稲種をハ田の色ちとハ定め形成天の邑君とやはしのさ人をもハ定めら家を不くを治めさせ給ひを稲種をたゞ免て天乃狭田長田とやハ田ヨハ植させ拙いし

也で秋ヨ玉りて手植ハ米に垂なびきて実ハ生さわまるさ素の木をバ天香山ヨハ植ハを拙ぢ〜蚕蜜のわざを色はじめ人列手蚕を口ヨ入くゝて糸をつむぎ養蠶紡織のまざをやく此時ヨ生はじまるとハ語傳ハちてある時須佐之男命叡速の略名天照大神ヨ仰上ゝ色ゝるを某ごゝ乃をじめより泣く吟ゝこのなるあヨ生ごうむ不の子ニ古男子をゆつ我色バたのづのらわ色繊ゝうしとハさまひてもとより荒く猛き性質あるヨ是ゝ以ハ猪不ゝりヨほゝり



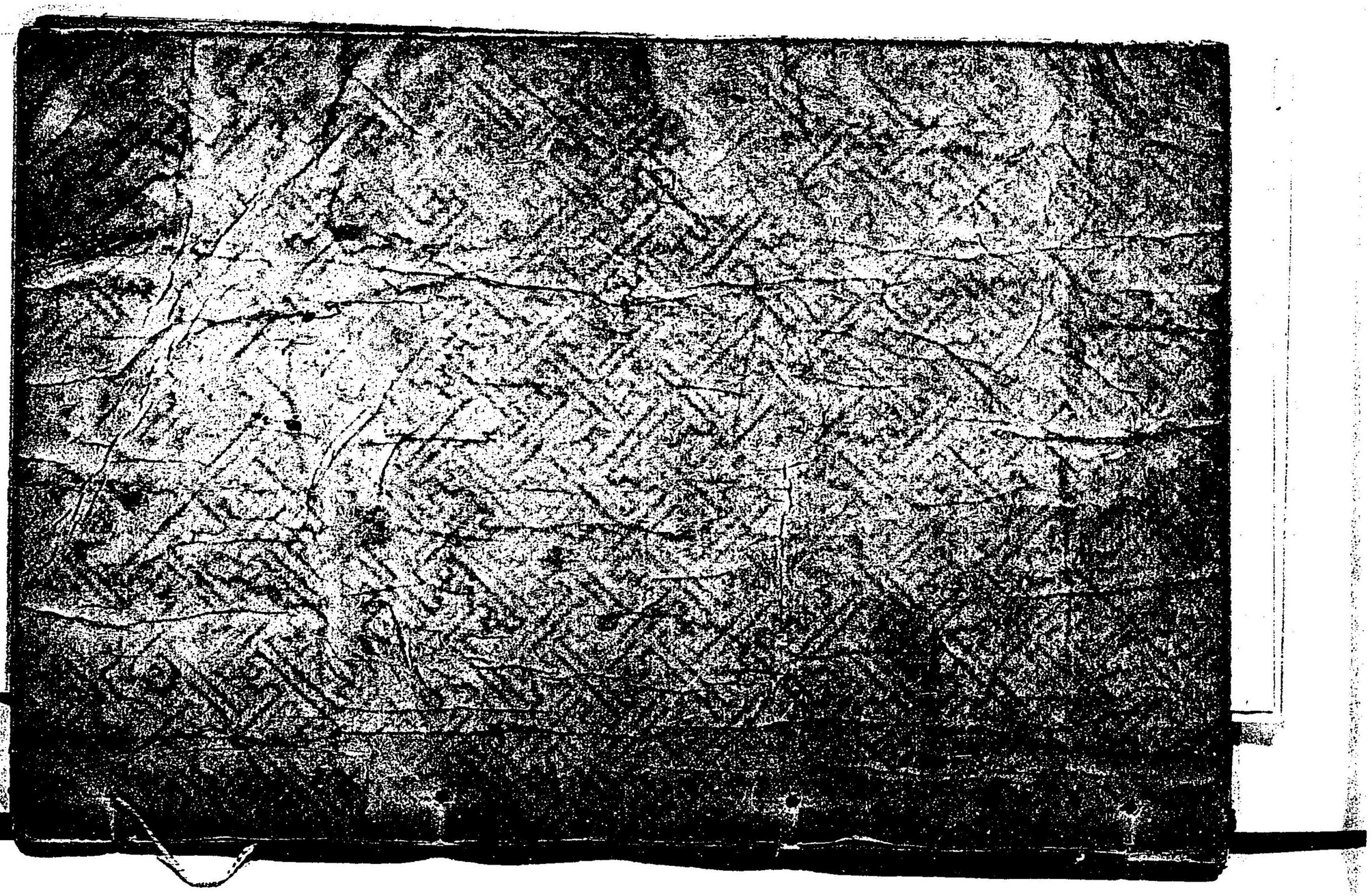

源正舟謹画

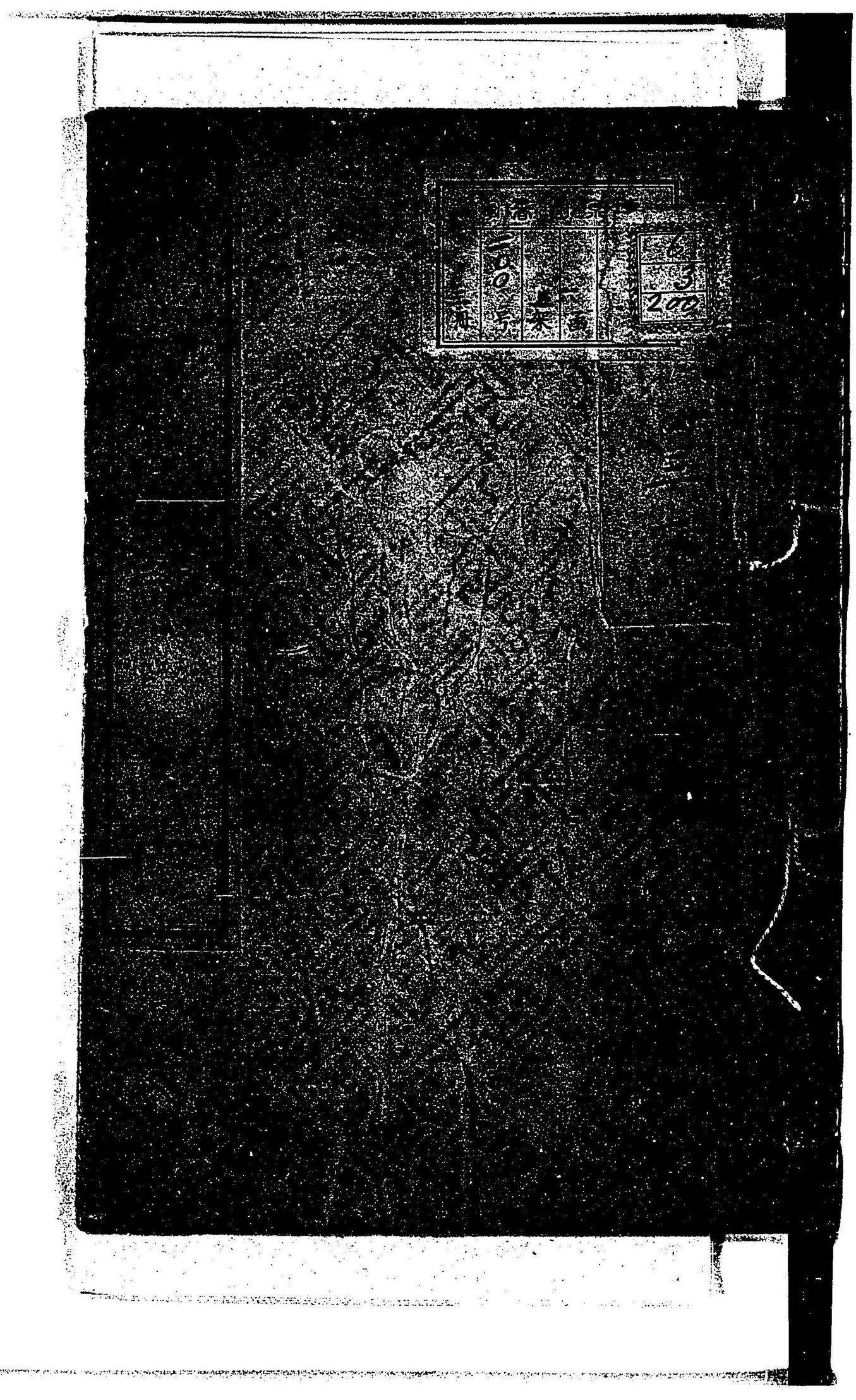
殺ひてさるべき悪きは不仍ども多く春は大は神乃伯らをあふは田乃畔を切窟しく手畠をはみだしなば成まさは田の溝を埋めて水をひく使を失はしめ或は水を堰貯へ並く為の樋口をあ破りて手水を流し挽まさ一度稙を蒔さる上ま重落とめるを赤して手苗をそこなひ秋は穀物已まみの至る時は絡縄を引まさし馬を田の中ま伏さし免又は串刺として田の中ま竹木などを多くはしまを立て人をして下立のさかしめまさ大は神の新嘗として新穀をはし免て下

上るは祝ひの時猶ま忌を清めあふ新は殿の内の賀物の下に元そのま屎を乃重ぬふ大は神は此の為るをともおろしめさば手はむしろま伏のおく後新しくはあ産抜ばしなるまはけぐれまは常生は成ぬ下は牙はちち安うしばは行やを成は へと毛はそうかからのれうつくしを以ては怒めもたくは恨毛抜ばさばもとより寛宥のは心なれば屎のごとをはをわの第命乃酒ま醸て吐ちらきまなる屋しまさ田の畦を穿しは田の溝を埋めなどしさるしわが茅舎は田地を惜みてはん

形〻学と作並さまてはゆゆ〻拵たゝはゝおくの
拵ゝ而手後元形頃依之勝命はは恐りはゝにや
むさとなくの至りの

猿渡盛章著神代俚談上巻終





014221−001−2

6−200

神代俚談

猿渡　盛章（樅園）／著

1冊（上41丁）

M7

ABB−0547